

小島烏水全集

第一卷

小島烏水全集

第六卷

大修館書店

小島烏水全集 第六卷 (第一回配本)

定價六八〇〇圓

昭和五十四年九月十日印刷
昭和五十四年九月二十日發行

著 者 小島 烏 水

發行者 鈴木 敏 夫

印刷者 青 木 勇

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三一二四
電話〇三(二九四)二二二一(代表)
〒一〇一振替(東京)九一四〇五〇四

第六卷 目次

雲 表

序

影不二を觀る記

相模野

冬の淺間山

日本アルプスの南半

一 信州に入る記

二 日本アルプス連嶺を觀ずる記

三 北穂高の高原

四 常念岳に登る記

中房温泉の記

燕岳及大天井岳に登る記

奥常念岳の絶巔に立つ記

一〇四

梓川の上流

一一三

日本アルプス 第一卷

序

二三の事ども

一一三

日本アルプスの意義

一二四

自然描寫の藝術

一二五

自然と作家

一二七

ラスキンの山岳論

一二八

附 ラスキン研究書目

一二六

富士山保護論

一三九

谿谷の水

一四〇

白峰山脈の記

一四八

附 白峰三山東京横濱間の汽車より見ゆ

一六六

白峰山脈に入る記

二九一

燕（小室妙法寺）

二九二

松・桔梗・鐘・青萱（七面山より西山峠）

二九六

鶯（峠の茶屋と森林）

三〇一

浴泉記（湯島温泉）

三〇八

峽谷の白百合（早川を溯る記）

三一一

山毛櫨・白樺（榛の河原）

三二〇

寒苦鳥（白剝山を踰ゆる記）

三二五

大井川の谷（最も感興を惹きし山水）

三三一

白峰山脈縦斷記

三三六

緒言

三四六

川　　楊（大井川の上流）

三四八

白花石楠花と高根薔薇（白峰山脈の一角に立つ記）

三五七

鼠色の印象（暴風雨前の富士山及び白峰山脈）

三六五

石・苔・偃松（白河内岳に登る記）

三七〇

汽船・電燈（農鳥山に登る記）

三七六

山の肌（間の岳の雪田に到る）

三八〇

羚羊・長之助草（北岳の絶巔に登る記）

三八四

信濃金梅・木賊（大樺谷に下る記）

三九〇

附録 余の登山經驗談（學生諸君のために）

三九三

圖版解説

四〇四

白峰山脈臆測圖解説

四一〇

高頭氏の地圖に就きて

四一一

山岳會創立のころ

山岳會設立に就きて

四二五

山岳會設立の主旨書

四二六

海拔一萬尺

四二九

赤石山の記

四三二

本會の成立

四三一

本誌の表紙

四三七

石 飯

四三八

新高登山の別働隊及び其糧食

四三九

南安曇槍ヶ岳

四四四

高山植物圖幅

四四五

Hand Book for Japan 第七版

四四六

『日本山嶽志』

四五〇

自然文學を起すの議

四五二

ヤマジヨラウに就いて

四五五

創見の字義

四五八

登山の導者養成に就きて

四六〇

登山の文書

四六九

山岳會の設立地

四七五

會員動靜

四七七

次號の本誌

四七九

會員諸君に

山岳地の旅行

山岳地の名稱に就きて

富士山

高山植物研究の材料

富士山登山の新道

山岳熱漸く高からんとす

本會と文學家諸氏

會員の本年登山報

解題・解説

近藤信行

四八〇

四八一

四八六

四九一

五〇〇

五〇四

五〇七

五〇九

五一

五五

小島烏水全集

第六卷

雲 表

“Let him spend his time no more at home,
Which would be great impeachment to his age,
In having known no travel in his youth.”

Shakespeare

この文よ

三たび足たゝずなりたる筑波根詩人の枕頭
に侍りて我が諸ろの旅がたりにしばしなり
ともわづらひ多き君を慰めよとて

横瀬夜雨君に獻ず

友人某君と語る。

某君曰く、文集を公けにするは、大晦日を過ぎす如しと、僕も亦然りと思ふ、過去を葬る點に於て、一段落を著くる點に於て、新しき行程に上る點に於て、しかして之を數次する間に、墳墓に入る點に於て。哀しからざるにあらずと雖も、何とも致し方なし、即ち借りて序となす。

明治四十年初夏

著 者

一、本書は山岳の旅行記なるを以て『雲表』と題しぬ、山岳ならぬ「相模野」を加へたるは、單調を避けんと欲してなり。

一、本書に挿入せる寫眞の中、燕岳及び槍ヶ岳雪田の二葉は、長野中學校教授志村寛氏の撮影寄贈せられたところ、繪畫二葉は、丸山晚霞、中澤弘光兩畫伯を煩らはしたり、共に厚意を謝す。

影不二を觀る記

彫刻師の刀と、畫家の刷毛と、幾何學者の定規とが、引くことを夢想せざる祕密の線を天の一方に現することあり、影不二是れなり、雪を冠りたる不二の影の、田子の浦や浮島沼に倒寫されたるものは、皴皴鮮やかに透明に過ぐ、影不二は虚空の紙障に、色なく、熱なく、印焼せられたる幻像なり、淡々として、無きが如く、有るが如く無限に隣座す、人の土足に踏み汚されたる不二の再現的に、瞬間的に純化して、帳は高し、神手にあらずんば、之を颺げ得ず、不二に登りて影不二を見ずんば、眞個不二の「奥の院」に詣でたりと言ふ可らず。

「神が其伎倆見する日選は曆に記されず」（泣菫）故に十たび不二に登りて、見るを得ざるものあり、初めて登りて見たるものあり、影不二の現はるゝは朝と夕、天地を兩分して、上半淨明下半は混沌として、水蒸氣の濃密をきはめたる時にあり、朝は日、東に出づるため、影不二は西の方、精進湖上に現はれ、夕は西に落暉するを以て、東方函根不二の間、御殿場の裾合谷邊に立脚するを常とする如し、余不二に登ること三回、その最後の登山は今年（三十九年）八月九日十日にして、幸ひに風流縁あり、影不二の缺線を臨摹し來るを

得たり。

左にその日記を作る。

八月九日、大月にて汽車を下り、好ましからぬ馬車に囚はれの身となりて、吉田に行く車を牽いて驚歩する馬は、紀元前の逸物と見ゆ、脊に被らされたる日除けの蓆に太々しく刻印せられたる二大字に B. C.

大野の中心に山あり、雲の止まるところ、大野の外廓に巷あり、人の群がるところ、「元身祿の茶屋」を標牌にせる上吉田の入口より、吉田の宿舎 Osakabe Hotel と羅馬字入りの團扇を客に勧むるところまで、距離十町、僅に十町にして、此間一世紀の歲月を劃す、登山客は、この短距離と長日月の沈澱層を通過して、初めて不二に參するなり、白衣、金剛杖、笠、鈴石華表、雜然、譁然として賑やかなれど、吾が大畫家「自然」は、自家の卓子の抽出にこれらのガラクタ道具を收めて、有用の手の觸るゝを俟つ、刑部（是れ余の宿舎なり）には、登山客二階の上下に踞踏するばかりに雜踏せり、余と同室の客は、書生二人、商人一人、丸山講の先達一人、この日雲低く垂れて、不二を見ず、夢と霧と互に窓の戸に懸りて、昧爽に及ぶ。

同室より同行三人を募りて發す、淺間神社に入りて先づ潛る「三國第一山」の額、念佛の行者の如く踞する石燈籠の背に寄進者の名を刻す、享和何年——人生はいかに短きぞ、人は一度より活くる能はず、そゝり立つ神杉の梢、無限を握まむとするも、一片の雲、行くところに行き、止まるところに止まるの自在に若かず、況して息苦しき大氣の上に挺んづる永劫の半身像をや、あまりに弱き人間を以て、その脚下に跪いて對比せしむ、自然も亦俳優性あり。